

## 普通の日

保育は毎日未知なままに進行する。昨日までに分かったことがあっても今日は別である。今日は新たにこの日に向かうのが保育者である。

ある日は子どもにとって成就感があり、保育者にとって発見があっても、次の日は違う。新たな出来事が起こり、どう考えてよいか分からない課題を負わされる。保育の場は子どもにも大人にも、人間の実生活だということを考え直せば、それはあたりまえのこと

津守 真

である。普通の日は、分からないことがたくさんあり、その中に小さな発見があつて、保育者自身が自分の考え方や生き方を点検する機会に恵まれている。

子どもと一緒に生活する日々は、毎日が違う日なのだが、大人の側から言つてその日々に共通のことがあるように思う。

毎朝、私は子どもたちの中で何かひと仕事しようと思う。かかわった子どもたちが、私との間で何かを十分にやりとげたということ

を見届けるまでつき合いたいと思う。その積極的な気持ちがないと、一日が散漫なままに終わってしまう。あるいは自分で気を散らせて、自分がらくなように過ごしている。

それから、毎朝、かかわった相手があるがままに見て、自分もあるがままに振舞いたいと思う。あるがままに見ることなど、厳密に言えばできるはずのないことである。だが、そう思って相手に向かうときには、自分の期待や予想を一時抑えて、眼前の子どもがしていることの中に、その子が欲し、感じ、考えていることを見ることができると。そのときに、相手を自分とは違う人格として認めて、交わることができる。

ある朝、門から入ってきたひとりの子どもが、門のわきのシーソーにひとりでのついたので私は傍にいった。その子はしばらく

じっと私を見ていたが、手をのばして私をシーソーに座らせた。一緒に揺らしながら、その子の好きな歌をうたっているとうれしうにしてときどき手を差しのべる。久しぶりにこの子とつき合うことになったので、私もうれしく、シーソーを激しく動かしたり、ゆるやかにしたりしてしばらく一緒にたのしんだ。

そのうちにその子は私に肩車してきた。これは外に連れていってくれという合図であることを私は承知していた。この子は外にいくのが好きで、一日に一度はだれか職員と外にいく日が多い。しかし、最近、私自身は自分の体力や社会的なことを考えて外にいかないことにしている。肩車して門とは逆の方向に歩くと激しく怒ったが、私は一緒にいかれないから他の先生を呼んでくるまで待つてねとことばをかけると、その子はおとなしく地

面にしゃがんだ。そしてしばらくしてひとりの職員と外出した。

子どもが私との間で十分にやりとげるまでつき合いたいと考えながら、それをできないままに、この日は私との関係は終わってしまった。そのことは残念だがこれが今日の自分の限界である。私の枠がもっと変化するならば、同様の場面でも違った展開があるだろう。こういう枠はどこまでいっても人につきまとうので、普通の一日には中途半端なところがある。

そのことのとあと、室内で電車を動かしている別の子どもと出会った。数日前、保育後のミーティングで、その子のことが話題になり、近頃十分に力を出せていないのではないかと何人もの人が心配していた。そして、その子と出会ったところで、それぞれの人が

しっかりとつき合うことにしようと言合っていた。

この日、私が傍にいくと、その子はいつものように私に話しかけてきたが、その会話の中に、「つかれた」ということはが何度も聞かれた。疲れたということは朝から子どもが口にするのは尋常ではない。もちろん、大人の言う意味合いとは違うだろうが、消極的な感情であることはたしかだろうし、これまでも何度か困難なことがあったこの子どもが、いま新たな自分自身の課題に当面しているのではないだろうかと考えた。私はこの子としっかりとつき合いたいと思い、箱積木を並べたり、他の電車を持ってきたりして床に腰をおろした。ところが数分もすると、私からすっと離れていってしまう。また戻ってくるかと待っていても、もう別のところで他の人を相手にして遊んでいる。

私はもっと違う魅力的なことはないかと思  
い、砂場の中で電車の通る道や丘を作りはじ  
めた。この子は庭の運動遊具の梯子の上から  
横目で見ていたが、砂場に入ってきた。もし  
て電車を動かしていたが、数分たつとまた  
すつと私から離れていってしまった。

子どもは、若い男性、若い女性、年配の女  
性、老年の男性など、そのときの自分に合う  
人を自分で選択する。最初私は、このとき、  
私は選ばれていないと思った。でもそれなり  
に私は自分がしていることが子どもに何か魅  
力を感じさせるものでありたいと考えて砂場  
に出た。この日、私のところから去っていっ  
たこの子どもを、気を付けて見ていると、い  
ろいろの場所で違う人を相手にして遊んでい  
た。そしてその合間に相当の時間を自分ひと  
りで何かをして過ごしている。いま何か困難  
に当面しているこの子どもは、だれか他人の

力に頼ってそれを乗り切るのではなく、ひとり  
でそれを解決しようとしているように思え  
た。その見方があたっているかどうかから  
ない。こんな工合にして一日は進行する。

この日は、この子と交わった大人はだれも  
が、中途半端なつき合いと感じたろうと思  
う。しかし、「つかれた」と言いながらも、  
その割に明るく過ごしている子どもの姿を見  
て、この子はいまや自分で乗り切っていくに  
違いないと信頼したと思う。次の日にはだれ  
かを選んで過ごすかもしれないし、そうすれ  
ば、この子が当面している課題がもっと明瞭  
になるだろう。保育者には中途半端な日と感  
じられても、その過程の一日一日が、成長す  
る子どもと大人の生活をつくっている。

昼近くなって、別の子どもが庭で梯子を一  
段踏みはずし、大したことはないのにワー

ワー泣いた。実習生がすぐに傍にいった。その子はこんなときいつも入りこむ室内に走っていき、実習生も一緒に走った。見ていると、その子がそのときに求めていることをこまかに見てとって受けいれ、応答しているように見えた。その子はやがて自由に動きはじめ、実習生もにこにこ笑って一緒に過ごして



いた。実習生はいつになくうれしそうで、この日、子どもをあるがままに見て動く体験をしたにちがいないと私は思った。  
結論はないままに一日は終わり、次の日の新たな状況に向かう。

(愛育養護学校)